



日本の盆栽と 東アジアの盆栽

文学部 緒方 賢一

さて、今から盆栽について文章を書こうとしているのだが、果たして盆栽に興味を持っている人などいるのだろうか、タイトルだけで敬遠されてしまうのではないだろうか。はなはだ不安ではあるが、とにかく始めたい。

盆栽といえば、庭先でおじいさんがハサミを持って枝や葉っぱをチョキチョキしていると、そばでボール遊びをしていた子供が勢い余って盆栽にボールをぶつけてしまい、おじいさん激怒！という光景が思い浮かぶ程度で、それ以上の感慨は特にない人が多いのではないだろうか。私もその一人であった、庭園に興味を持ってしまうまでは。

私は中国庭園を研究しているが、きっかけは学生時代に中国を旅行したことにある。江南（長江下流域）地方の都市を巡っていると、清代に建設された庭園があちこちに残っていることに気がつく。そのいくつかに入ってみると、日本庭園とあまりに様相が違っているのに驚き、中を遊覧している現地の人は何の違和感も抱いていないことに（当たり前だが）、再び驚いたのであった。で、いつかこれを調査・研究してみたいと思って今に至るわけなのだが、それはともかく、中国といえど庭園には当然のことながら盆栽が置いてある。

この中国の盆栽がまた変わっている。我々のイメージする盆栽とは、植木鉢に松などが植えられているものが一般的だと思うが、中国の盆栽は、鉢の上に植木と石が載っているのが基本形なのである〔写真1〕。さらに、石しか載って

いないものさえある〔写真2〕。どうやら中国の盆栽は日本の盆栽とずいぶん異なっているようである。



〔写真1〕



〔写真2〕

盆栽といえば日本独自の芸術だと思っている人が多いだろう。たとえば並松信久は「盆栽は日本を代表する美術文化のひとつである。今日、BONSAIという言葉が使われているように世界各国に広がっている¹⁾」と語る。アマゾンで盆栽関係の本を検索してみると、確かに数え切れないほどの盆栽本がヒットする。『盆栽世界』『月刊近代盆栽』などの盆栽専門誌があるかと思えば、『猫街盆栽店』『雨天の盆栽』という盆栽を主題にした漫画まであるようだ。

続いて「BONSAI」で検索すると、ジャパニーズ・ボンサイ関連の英語の本がまたもや大量に表示される。日本の盆栽が国内外を問わず、広く認知され、人気を集めていることが、ちょっ

1) 並松信久「近代盆栽の成立と文化融合 ―自然の「仕立て」と国風化―」『京都産業大学論集 人文科学系列』第54号、2021年。

と調べただけですぐに判明する。

しかしこの盆栽も、やはりというか中国に起源がある。中でも有名なのは、唐の章懐太子の墓に描かれた壁画である。絵の中では、侍女が両手で丸い鉢を抱えており、その鉢の上には石の山と赤い花をつけた植物が載っている。

韋金笙によると、中国の盆栽は「山水」を縮小して盆上に再現したものだという²⁾。魏晋南北朝期に大自然を理想郷と捉え（「山水」の成立）、それを絵や詩に表現するようになるのだが、盆栽はその山水を立体として構成したものである。人々は盆栽を眺めながら、仙人となって深山幽谷に遊ぶおのれを思い浮かべたに違いない。この盆栽はやがて朝鮮³⁾、日本、さらにはベトナムにも伝わった。

ベトナムの盆栽は独自の発展を遂げている。「ホンノンボ」と呼ばれるベトナム盆栽は大きめの盆に水を張り、そこに石の山を載せ、あちこちに植物を植え、さらに建物や人のミニチュア

を配置するのが基本形である〔写真3〕。中でもミニチュアが目を引くが、宮田珠己の調査によれば、ホンノンボには「四つの職業（漁師・木こり・農夫・畜産）」と「三つの宗教（仏教・道教・儒教）」が表現されているとのことである⁴⁾。例えば、本を読む人のミニチュアは儒教を表しているのだという。

ひるがえって日本の盆栽であるが、中国やベトナムのものとは異なり、基本的には鉢と花木だけで構成されている。そこに、夾雑物をそぎ落とした、枯山水庭園にも通ずる「日本の美」を見出す人もいるだろう。

しかし、この日本的盆栽は実は近代になって生み出されたものであり⁵⁾、盆栽業界(?)では「近代盆栽」と名付けられている。鎌倉・室町期の盆栽は、中国式の石と花木を組み合わせる形式が主流であり、江戸に入ると、石を用いる「盆山」と、草木メインの「鉢木」との、二つの流れに分岐する。

明治期に入ると、盆栽は「室内に置かれるもの」として、よりコンパクトな形になる。明治6年（1873）に開かれたウィーン万博に日本が「BONSAI」を出品したその時が、おそらく盆栽が東アジア以外の国々に認知された瞬間であろう。

大正・昭和になると、各地で展覧会が開催され、盆栽は中国由来ではなく、日本独自の文化だという意識が形成されるようになる。

本場中国が辛亥革命、日中戦争、共産主義国家樹立などの激動の時代を経ている間に、たまたま少しばかり早く開国、近代化および経済発展を遂げた日本が西洋世界に注目される対象となった。結果として盆栽も「JAPANESE BONSAI」なる「日本文化の精髓」を体現したものと脚光を浴びることとなったのである。



〔写真3〕

2) 韋金笙『論中国盆景芸術』上海科学技術出版社、2004年。

3) 朝鮮の盆栽については、李樹華「朝鮮盆栽・盆石の確立における中国の影響」（『ランドスケープ研究』第62号、1999年）が参考になる。

4) 宮田珠己『ふしぎ盆栽ホンノンボ』ポプラ社、2007年（後、講談社文庫、2011年）。

5) 以下の記述は、前掲並松論文および依田徹『盆栽の誕生』（大修館書店、2014年）を参考とした。